

## 外国人労働者の育児環境と子育てについて —在日ブラジル人の子育ての状況から—

育成期看護学講座：服部律子・堀内寛子・藤迫奈々重・兼子真理子・清水智美  
大垣市保健センター：高木きぬ子・川合美知恵 大垣国際交流センター：井上秀夫

### 【研究の背景と目的】

1990年入管法を改正により、外国籍の2世・3世にも合法的に日本に在留し、単純労働につけるようになった。バブル崩壊後、かつての勢いがないまでも、岐阜県の外国人総数は36,595人(H12年)で、対前年比は+17.4と、着実に増加の一途をたどっている。また、これまでの単身型から家族を呼び寄せる傾向が強まり、特に日系ブラジル人の増加は著しく、大垣市・可児市・美濃加茂市・各務原市を中心に定着性、定住性を深めている。多くの外国人は、日本での滞在が長期化する中で医療や子どもの保育・教育等、日常的な生活の中で生じる様々な問題に直面している状況である。

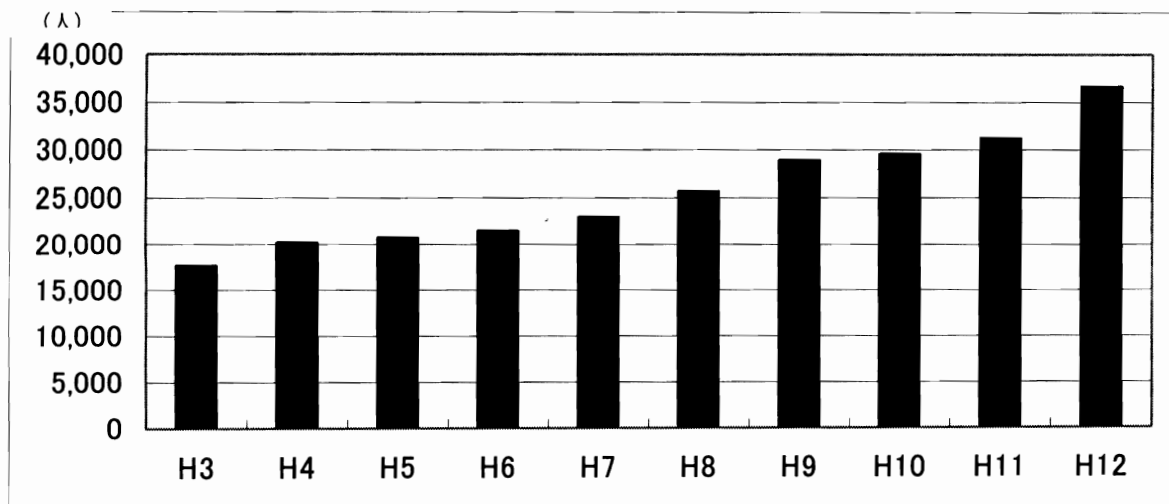
そこで今回、県内にある2つのブラジル人学校での聞き取り調査により、最も身近な保育士側から見る、在日ブラジル人の子育ての現状と問題点について検討した。

### 【岐阜県の現状】

岐阜県の在日外国人の現状を図1に示した。岐阜県の外国人登録者数は、1990年(平成2年)の入管法改正と同時に急増し、翌年平成3年には、17,598人(対前年比30.8%)となった。その後着実な増加を示し、近年わが国の経済不況による失業問題が重要視される中、平成12年には36,595人(対前年比17.4%)まで増加した。

次に岐阜県市別外国人登録者数のグラフを、主要国籍別に図2に示した。最も外国人の多い、岐阜市では、古くから在住する在日朝鮮・中国・韓国人が全体の半数を占め、つづいてフィリピンの順であった。しかし、つづいて多い大垣市、可児市、美濃加茂市、各務原市においては、全体の約7割がブラジル人で、特に可児市においては、在住外国人の8割がブラジル人であった。

各市の産業、経済基盤によって、在日外国人の主要国籍に明らかな特徴が見られた。



年	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12
総数(人)	17,598	20,201	20,733	21,488	22,920	25,610	28,877	29,510	31,180	36,595
対前年比(%)	30.8	14.8	2.6	3.6	8.7	11.7	12.8	2.2	5.7	17.4

図1 岐阜県の在日外国人推移

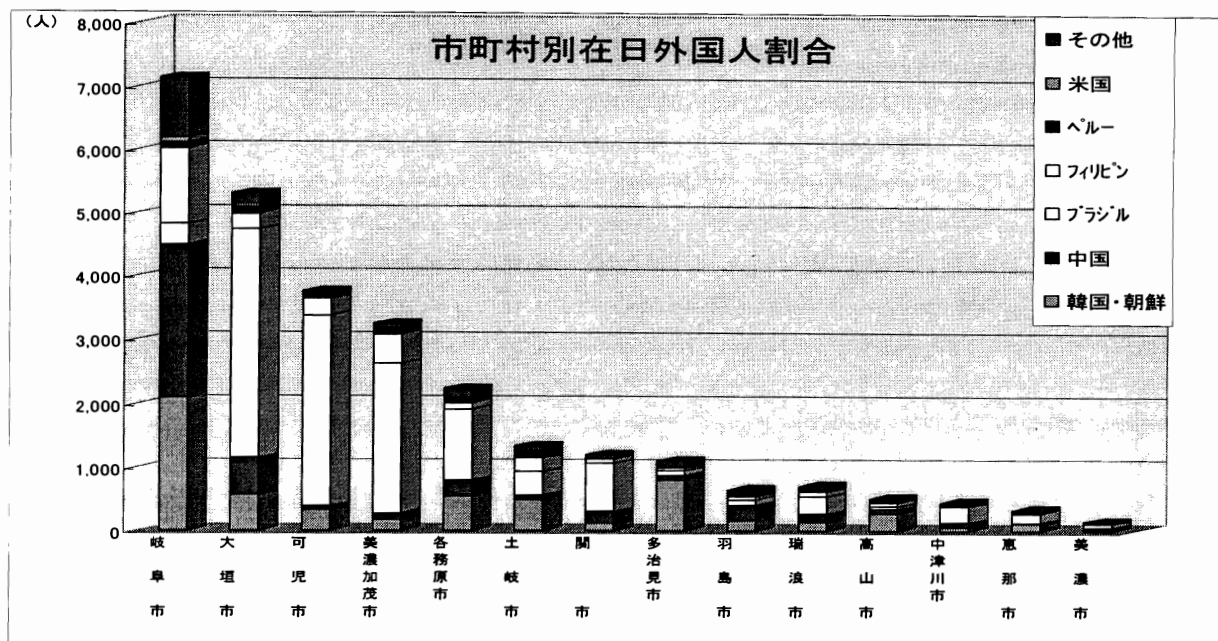


図2 市町村別 在日外国人割合

【調査対象と方法】

- 1.調査期間：平成13年11月～12月
- 2.調査対象と方法：岐阜県下にあるブラジル政府認可校で、乳幼児を受け入れている2施設。直接保育担当者（日本人・ブラジル人）より、保育者側から見た、日本における在日ブラジル人の子育て状況と問題点について聞き取り調査した。調査は、大学の教員が1-2名ブラジル学校に出向き、調査に承諾された保育士から個別に、親や子どもの現状について、日常の状況から普段感じていることを自由に話してもらい聞き取りを行った。調査にかかった時間は一人20-30分程度であった。2施設計6名の保育者から聞き取り調査結果をまとめた。

【結果および考察】

結果を表1に示す。

1.保護者の状況

労働条件については、父親の多くが夜勤のある2交代制および週6日の勤務に従事するものが多い事や、会社側の都合もしくは、身体子どもの事など理由に関係なく1週間以上の休暇申請、または残業などの要請拒否ですぐに解雇対象になるなど、外国人ゆえの労働条件の過酷さ、不安定さがあがった。また、日本での生活は共働き世帯が多く、安定性はないものの収入は比

較的多い。日本で得た収入は母国への仕送り、日本での生活、物、教育費にかけ、お金を稼ぐためだけの仕事中心の生活である事がわかった。その為、厳しい労働条件下、仕事中心の生活はストレスも多く、仕事と育児の両立の困難さについて挙げられた。仕事がきつく長時間で、イライラする事も多い。普段十分に子どもと接する時間もない状況である。しかしこれらは、高額な仕送り、生活の充実、教育の充実、物欲を満たし不自由な生活をする事が、親達の「誇り」でもあり、それら価値観によって創りあげられている生活実態がある事もわかった。したがって、仕事中心に育児環境が作られる中、成長発達段階で最も親子のふれあいが重要な幼児期において、大人の生活に子どもが合わせられている現状である事がわかった。

2.子どもの特性

子ども達の行動面で、物に対して贅沢、物を大事にしない、我慢できない、嘘をつくなどの特徴が挙げられた。親は子どもとの関わりが十分に取れない分、代償を物やお金に依存し、お小遣いを渡し、物を買って与える事で子ども達への愛情を補おうとしている。これらは物への不自由さがなく、わがまま傾向にある事が指摘された。反面情緒的に、異常な甘え、寂しがる、独

表1	内 容	要 約
	<b>【親の状況】</b>	
	・父親のほとんどが夜勤のある仕事についている(2交代制、週6日間勤務)	生活実態
	・母親の仕事は日勤が多いが、残業などの要請に断ると辞めさせられるので拒否できない	
	・長期の休み申請(5日～1週間)で退職勧告を受けるため、子どもや自分が病気で休んでも休みを取れない	
	・親達の労働条件は不安定だが職場の要請に従うしかない	
	・親達は、職場の状況ですぐにリストラ対象となるため不安を持っている	
	・学校は基本は9時から15時までだが、仕事の関係で朝7時から19時ごろまで学校にいる子どももいる	
	・日本での生活の中心は、仕事をしてお金を稼ぐ事になっている親が多い	
	・共働き世帯が多く、安定性はないが収入は比較的多い。	
	・収入の中心は、母国への仕送り、日本での生活、教育費にかけている	
	・親達の仕事と子育ての両立に対する負担が大きい	
	・親達は仕事がつく、長時間で疲れているため、イライラする事や夫婦喧嘩多い	
	・子どもに不自由なく物を与えられる事を誇りに思っている人も多い。	価値観
	・日本での目的は、多くのお金を稼いで、高額な仕送り、生活の充実、子どもへの教育の充実、物欲を満たし不自由なく過ごさせたいと思っている	
	・仕事中心の暮らしのリズムに子どもを合わせているので、親による家庭でのしつけ、育児ができない	育児状況
	・親は普段子どもと接する時間がないので、子どもをかわいそうに思い、物や小遣いで愛情を補おうとし甘やかす	
	・乳幼児期の子どもの持つ親は、年齢も若い。育児経験がなく、育児の知識が低い	
	・子どもの世話が出来ない、ネグレクト状態の親もいる	学校との関係
	・子どもとの会話時間が少ない(週末労働や週末休みでも家事に追われ、家族で出来るのは買い物程度)	
	・高い月謝を払っているからと、学校に教育・しつけ・子どもへの愛情・育児すべて依存してくる	
	・親は通常月～土曜日の出勤が多いが、週末は家事と買い物以外疲れて「寝ている」為、週末の学校行事の参加は出席できない	
	<b>【子どもの状況】</b>	
	・物に対して賛沢、物を大事にしない、我慢が出来ない、嘘をつく傾向が強い	行動
	・幼稚園まで日本の幼稚園にいた子で、問題行動のある子がいる。日本の幼稚園でいじめの問題やいつも叱られてばかりいることが多かったようだ	
	・保育施設に楽しんできている子が多い。休みに日を嫌う子もいる	情緒
	・わがまま、異常な甘え、寂しがる、独占欲が強い	
	・親で満たされない愛情を、先生に求めてくる子が多い	発達
	・家庭内での会話は少なく、言葉話し出すのが遅い、2-3歳頃にならないと話さない子ども多いが話し出したら早い	
	・4歳くらいの子どもので、自分で食事ができない子どもが数人いた。その子ども達の状況を見ると、親が日常の忙しさの中で、洗濯や掃除の手間が増えることを嫌がり、親がずっと食べさせていたためだった	
	・親と子どもが接する時間が少ないため、特に1歳半くらいまでの乳児期の子は、先生が親だと思っている子もいる	
	・入園が遅い子の中には、3歳でもオムツの子どももいる。排泄の失敗で親の手を煩わせない為に、トイレトレーニングせず、オムツのままにしていたためであり、中には6歳でも、夜間オムツをしている子もいる(学内でトイレトレーニングをしても、休みにになるとまた元に戻ってしまう)	
	・家ではテレビとゲームで過ごす多い(近所に遊ぶ子がいない、親は遊んでくれないなど、兄弟が少ない)	遊び
	・おもちゃ、ゲームなど新しいものは、ほとんど持っている	
	<b>【将来の不安】</b>	子どもの教育
	・日本の教育とブラジルの教育の違い、将来のためにどっちを受けさせたら良いか迷っている親が多い	
	・日本でのいじめが原因で子どもの教育の為に帰国する人もいる	
	・帰国後の生活(経済的不安、言葉や生活習慣から、帰国後の生活が心配)	生活
	<b>【ブラジルと日本の子育ての違い】</b>	育児環境
	・母親が子どもを放っていること。常に仕事やお金の事ばかりで子どもを不安にさせている	
	・ブラジルでも若い母親が多いが、一番は家族、次にみんなで話し合う事、忙しくてもみんなで協力して愛情を常に持っている。しかし、日本に来ると忙しくて愛情も忘れていく。	
	・ブラジルでは、周囲に親、祖父母、兄弟姉妹がおり、助け合いいろいろなアドバイスを受けることが出来るが、日本ではほとんど若い夫婦の核家族で、子育てについて話す人、アドバイスも受けられない	
	・ブラジルでは週末は大家族。日本では週末も子どもは孤独。親は家にいてもテレビやゲームで遊ぶ	
	・ブラジルの学校では、週1回程個別で親と話す機会があった。日本では、学期終了時に面談を必ず持つようにしている。また日常いつでも対応できるようにしているが、親は、仕事に追われなかなか来れない。また問題のある子どもの親ほど学校に来ない。	
	・学校と親とのコミュニケーションがとりにくい。親と先生が一体となって子育てに参加できない	ストレス
	・親が子育ての両立でイライラとストレスが高く、子どもを不安にさせている事が多い。夫婦喧嘩も子どもの前でしていることも多いようだ。乳児期から放っておかれる子ども、親の喧嘩を見たり家庭内でのストレスが高い子で、専門家に見せたほうがいいような状況の情緒的に不安定な子どももいる	
	・ブラジルでの生活は大変なので、物やお金にゆだねて、子どもの満足感を持たせる事はない	価値観の変容
	<b>【保健知識と保健行動】</b>	保健知識
	・若い親の中には、予防接種などの必要性を知らない人もいる。(必要性についての知識がない)	
	・乳幼児期に多い感染症(麻疹、水痘、おたふくかぜなど)の知識がなく、気づかないまま学校に連れてくる親も多い。(感染症とわかって、仕事が休めない理由で、学校につれて来る親もいる)	
	・ブラジルでは若い夫婦も多い(16.17歳)子どもに多い病気や対処法についての知識がない親も多い。	情報
	・予防接種は子どものいつの時期に必要で、それがいつどこで、何の接種が行われているかの情報が得られない	
	・日本語がわからない。どこに行ったら情報が得られるのかわからない。ブラジルと日本の違いがわからない。	保健行動
	・子どもを何科に連れて行ったらいいのかわからないので、多くの親はすぐに総合病院へ連れて行く。クリニックは利用しないそのうち日本での生活が長くなると、日本人の多く行くクリニックや病院へ行くようになる	
	・風邪を引くのは薄着によるものと思込んでいるので、11月くらいから4枚も5枚も着込ませてくる。たくさん着せれば大丈夫と思っている。	
	・発熱時は冷たいシャワーを浴びさせ冷却するのが良いと思っているので、日本の冬でも同じ事をしている。日本は気候、気温、湿度も違うので良くないと伝えても理解できない	栄養
	・ブラジルのミルクを飲んでいる子は成長不良(小柄)の傾向があり、日本のミルクを飲んでいる子は大きい。	
	・4ヶ月～離乳食開始、5-6ヶ月から牛乳を飲ませている(牛乳にお砂糖やココア、レイチ等を入れて飲ませる人が多い)。ポカリジュースも同様	

占欲が高いなど、親で満たされない愛情を学校の先生に求めてくる傾向にあった。発達面では、言葉の発達の遅れや、自分で物が食べられない、6才になってもオムツの子どもがいるなど、家庭内でのコミュニケーション不足や日常の忙しい親の生活に子どもがあわせられる中で、親の関わりの不十分さが子どもの成長発達に影響を及ぼしている事がわかった。また、家庭では主にテレビやゲームが中心で地域周辺での子ども同士の関わりが少ない事もわかった。

### 3. 将来の不安

多くの親が将来の帰国を望んでいる。しかし、帰国後の生活に対する不安の他、子どもの教育への不安が大きい。母国ブラジルは高学歴志向にあり、学歴がないと職に就けない。だが日本の教育とブラジルの教育の移行制がないために、日本の教育を受けたものは、ブラジルでは落第生の扱いとなる(表2)。その為子どもの教育の選択に苦慮している親が多いことがわかった。また、日本での教育を受ける中で、いじめの問題は深刻で、子どもの教育を考え一旦母国へ帰国し再度来日する人たちもいる事がわかった。

表2 教育制度

日本の教育制度	ブラジルの教育制度
乳幼児部	乳幼児部
小学校 6年間	小等部 1・2・3・4年
中学校 3年間	中等部 5・6・7・8年
9年間	8年間
高校 3年間	高校 3年間

### 4. ブラジルと日本の子育ての違い

ブラジルでの生活は貧しく厳しい。しかし、地域や身近に家族の存在があり、家族の大切さ・協力・温かさの中で育児が行われ、学校や地域とのかかわりも密接である。しかし、日本での生活は、お金と物に満足感を求めるがゆえに仕事中心の生活になり、子どもを放っている親が多く、子どもに精神的な負担をかけている

事がわかった。週末も、ブラジルでは大家族が集まり時間を過ごす、日本では買い物や掃除・洗濯などの仕事でおわれ、あとはゆっくり休みたいと思う親と、一緒に遊びたい気持ちを我慢する子ども達等、親ばかりでなく、親子関係・友人関係・地域関係から、子どもにとってストレスが多い状況にあることがわかった。

### 5. 親の保健知識と行動

多くのブラジル人は日本語の読み書きおよび会話も十分ではない。言葉の問題から情報取得の難しさもある中、乳幼児期の子どもを持つ親が比較的若く、育児、保健知識が低い事がわかった。気候や文化・習慣も大きく違う中で、現在の子育てが、これまで母親達が得た経験や数少ない知識の中で行われている事が多く、特に子どもの病気や突然の出来事に対する不安を持つ中で、子育てが行われている事がわかった。

#### 【まとめ】

今回の調査から、外国人労働者と呼ばれる人達にとって、日本での生活は厳しく、その事は直接子どもたちを取り巻く環境として、成長発達に大きく影響しているものであった。清水らによる、在日ブラジル人の母親に対する静岡県浜松市(在日ブラジル人が多い市)の調査でも、8割以上の母親が子育てのつらさを感じ、育児ストレスとしては、6割以上の母親が抱えている結果であった。今回の報告は、日常子ども達と深く接している保育士側からの、在日ブラジル人の子育ての現状を調査したものであるが、親のストレスもさることながら、子どものストレスは、保育する側が危惧するほどであり、その事は子ども達が成長する過程での大きな問題となる事が予測された。

以上のことから、岐阜県における在日外国人の動向を踏まえ、今後在日外国人の子育てを巡る詳しい調査を実施して検討していきたい。